謝辞

歯学部歯学科４年　新谷　愛

ご遺体を初めて目前にした時、献体してくださった方の崇高なご遺志と私たちへの期待を肌で感じ、この思いを決して裏切りたくないと強く感じました。ご遺体から、余すことなく学び取らせていただこうと決意を固めた時のことを、はっきりと覚えています。同時に、そのご遺志を尊重し、私たちの元へ送り出してくださったご遺族の皆様の複雑な心境が想像できました。私も家族の死を受け入れることが非常に困難だった経験があります。そのため、ご遺族の気持ちを想像すると、胸が詰まるような思いがしました。大切なご家族をお預かりしていることを改めて実感し、献体してくださった方とそのご遺族に、深い感謝の念を抱きました。

解剖学実習では、非常に多くの学びがありました。特に感動したのは、神経叢の構成です。神経叢の構成は複雑であるにもかかわらず、その構造は教科書で確認した通りであり、また筋の起始と停止も、ほとんど教科書の記載と一致していました。人の身体はもっと個体差が大きいものだと思っていたので、これほど共通した構造をとることに感動を覚えました。改めて、解剖学を学ぶ意義を明確にすることができたように思います。一方で、神経や血管の分岐・走行は、ご遺体によって異なることも多くありました。他の班のご遺体と比較しながら解剖を進める中で、口腔底のオトガイ下動脈と舌下動脈の走行パターンには複数の型があることを確認しました。ここは歯科治療を行うにあたって非常に重要で、侵襲のリスクが高い部位です。それぞれの患者さんの神経や血管の走行を、Ｘ線やＭＲＩ画像を通して把握した上で治療を行うことの重要性を強く実感しました。

解剖学実習を通して得られたものは、人体の構造に関する学びだけではありません。生命の尊さに触れ、自らの生き方を考え直す貴重な経験になりました。ご遺体の解剖を進めていくと、その方が歩んで来られた人生の片鱗が徐々に垣間見えてきます。口腔衛生状態や義歯の使用状況から、最後は口から食べていなかったのではないか。筋線維が減少していることから、寝たきりの期間が長かったのではないか。血管の損傷部位や状態から、長期間点滴をされていたのではないか。全身のリンパ節が硬く、大きくなっていたことから、全身にがんが転移して苦しまれていたのではないか。そのような推察を重ねながら、人生を全うされた目の前のご遺体に畏敬の念を感じずにはいられませんでした。至る所に確認された手術痕から、多くのご病気と闘われてきたことが伺えましたが、白内障の手術痕を確認した時に班員がふとつぶやいた一言が強く印象に残っています。

「この目でどんな景色を見てきたのかな。」

この言葉を聞いて、戦争の真っ只中でかけがえのない青春を過ごされたであろうその方の人生のストーリーに思いを馳せました。直接お話を伺うことはできませんが、その方が歩んでこられた人生の深み・重み・尊さを、全身から伝えてくださっているように感じられま

した。錯覚かもしれませんが、その方と対話をして、心を通わせることができたような温かさを覚えました。同時に、献体という選択を通して、歯科医師を目指す私たちを応援してくださっているのだと感じ、励まされました。この貴重な経験を通して、私もこの方のように後世に貢献できるような生き方がしたいと強く思うようになりました。

解剖学実習の最後の日、ご遺体とお別れするのがとても寂しく感じられました。至らないところばかりの自分をいつも側で見守ってくださり、ハードな解剖学実習を一緒に乗り越えてくださった大切な存在となっていたからです。いつかこの方に喜んでいただけるような、立派な歯科医師になれるよう邁進しようと思います。そして、歯科医師として患者さんの口腔状態だけでなく、全身状態や生活背景に寄り添いながら、口腔を始めとする全身のＱＯＬの向上に貢献することを通じて、このご恩をお返ししていこうと決意しています。ご献体賜りました故人のご冥福を心よりお祈り申し上げますとともに、ご理解・ご協力頂きましたご遺族の皆様に厚く御礼申し上げ、謝辞とさせて頂きます。